

## ソヴェトロシアの経済建設

注) 本文と14-33、17-3で「十月革命四周年によせて」の全文である。

最後の——だがもっとも重要でもあれば、もっとも困難でもあり、またもっとも未完成でもあるわれわれの事業、それは経済建設であり、破壊された封建制の建築物と半ば破壊された資本主義の建築物とのあとに、新しい社会主義の建築物の経済的土台をすえることである。このもっとも重要で困難な事業において、われわれはこのうえなく多くの失敗やこのうえなく多くの誤りをおかした。このような全世界的に新しい事業を、失敗もなく誤りもなくはじめることなど、どうしてできよう！ だがわれわれは、それをはじめた。われわれはそれをやっている。われわれはまさに現在、多くのわれわれの誤りを、わが「新経済政策」によって是正しており、今後どうしたらこういう誤りをおかすことなく小農民的な国に社会主義的建築物を建てることができるかを、まなんでいるのである。

困難はかぎりない。しかしわれわれは、かぎりない困難とたたかうことに慣れてしまった。われわれの敵は、なにかにつけて、われわれのことを「石のように堅い」とか「骨折政治」の代表者だと、<sup>あだな</sup> 綽名した。だが、われわれもまた学びとった——すくなくとも、革命に必要な別の<sup>ぎりよう</sup> 技倆を、ある程度まで学びとった。すなわち、これまでの道が当面の時期に不相当であり、不可能であるとわかれば、変化した客観的諸条件を考慮にいれ、われわれの目的にかなった別の道をえらんで、自分の戦術をすばやく急転換するだけの柔軟性、手腕を学びとったのである。

熱狂の波にのって、最初は一般政治的な、のちには軍事的な、人民の熱狂を呼びおこしたわれわれは、こんなにも大きな（一般政治的な任務とも、また軍事的任務ともおなじくらい大きな）経済的任務を、直接この熱狂にのって実現しようと、あてこんでいた。あてこんでいた、——と言うより、つぎのように言ったほうが正しいかも知れない。すなわち、われわれは、十分な考慮もせず、小農民的な国で物資の国家的生産と国家的分配とをプロレタリア国家の直接の命令によって共産主義的に組織しようと、考えていたのである。実生活は、われわれの誤りをしめた。一連の過渡的段階が必要であった。すなわち、共産主義への移行を準備する——長年にわたる努力によって準備する——ためには、国家資本主義と社会主義とが必要であった。直接に熱狂にのってではなく、大革命によって生みだされた熱狂の助けをかりて、個人的利益に、個人的関心に、経済計算に立脚して、小農民的な国で国家資本主義を経ながら社会主義に通じる堅固な橋を、まずはじめに建設するよう努力したまえ。さもなければ、諸君は共産主義に近づけないであろう。さもなければ、諸君は幾百万幾千万という人々を共産主義に導くことができないであろう。実生活はわれわれにこうかたった。革命の発展の客観的な経過は、われわれにこうかたったのである。

そしてわれわれは、三年か四年のうちにいくらか急転換を学びとった（急転換が必要となると）が、このわれわれは、また新しい転換、「新経済政策」をも熱心に、注意ぶかく、根気よく（とはいえ、まだまだ熱心さもたりなければ、注意もたりないし、また根気もたりないのだが）学びはじめた。プロレタリア国家は、慎重で、勤勉で、手腕のある「経営主」、実直な卸商人にならなければならない。——そうするよりほかには、プロレタリア国家は、小農民的な国を経済的にひとり立ちさせることはできないし、またいまのところ、現在の条件のもとでは、資本主義的な（ここ当分は資本主義的である）西ヨーロッパと肩

をならべて共産主義に移行する道はない。卸商人というものは、共産主義から、天と地ほどかけはなれた経済的類型であるかのようなものである。だが、これは、生きた生活のなかで、小農民経済から国家資本主義を経て社会主義に導くような、まさにそのような矛盾の一つである。個人的関心は生産をたかめる。われわれに必要なことは、まず第一に、ぜひとも生産を増強することである。卸商業は、幾百万という小農民に関心をもたせながら、彼らを結合させて、つぎの段階へ、すなわち、生産そのもののなかでの結合と団結のいろいろな形態へと導く。われわれはすでに、わが経済政策の必要な建てなおしを開始した。われわれはすでにこの分野で、若干の——たしかにたいしたものではなく、部分的なものではあるが、しかし、それにしてもやはり疑いない——成功をおさめている。われわれはこの新しい「科学」の分野では、すでに予科を終了しつつある。しっかりと、たゆまず学びながら、実際の経験によって自分の一步一步を点検しながら、すでにはじめたことを何度やりなおしても自分の誤りを是正することをおそれず、誤りの意義を注意ぶかく探究しながら、われわれは、つぎの学級にすすもう。世界経済と世界政治の諸事情は、この「課程」をわれわれの望んでいたよりもはるかに長く、はるかに困難なものにしたけれども、われわれはその全「課程」をおさめよう。過渡期の苦悩、貧苦、飢餓、崩壊がどんなに苦しくても、どんなことがあっても、われわれは落胆せずに、自分の事業を最後の勝利をおさめるまでおしすすめよう。 注) ……は本文中の略

1921年10月14日

第33巻「十月革命四周年によせて」P44~46  
「プラウダ」第234号、1921年10月18日